

七三一部隊のはなし

十代のあなたへのメッセージ

著者◎西野瑠美子

さし絵◎日野多津子



明石書店

西野留美子 (にしの るみこ)

1952年長野県生まれ。信州大学教育学部卒業。小学校教師を経て、現在ルポライター。在日の慰安婦裁判を支える会、信州児童文学会会員。「21世紀を展望する戦後補償 1～10」(『月刊マスコミ市民』)、「731部隊と従軍慰安婦」(『全国婦人新聞』)、「731部隊は幻か」(『ふえみん』)を連載。

[著書]

『従軍慰安婦・元兵士たちの証言』、『従軍慰安婦と十五年戦争・ビルマ慰安所経営者の証言』(明石書店)、『従軍慰安婦110番・電話の向こうから歴史の音が……』(共編、明石書店)、『従軍慰安婦のはなし・十代のあなたへのメッセージ』(明石書店)、『戦争責任』(共著・樹花舎)、『七三一部隊』(講演記録・東方出版)、『日本軍「慰安婦」を追って』(マスコミ情報センター)。

日野多津子 (ひの たづこ)

1943年生まれ。東京都出身。画家。まつやまふみお氏に師事。日本美術会附属研究所卒業。日本アンデパンダン展出品。婦人、児童書、新聞・雑誌などの挿絵、装画。

[主な本]

『春を見つけた』、『保育室の民話』(童心社)、『たま子の戦争』(けやき書房)など。

**七三一部隊のはなし
十代のあなたへのメッセージ**

定価はカバーに表示してあります。

1994年6月30日 第1刷発行

1995年6月30日 第2刷発行

著者 © 西野留美子
さし絵 日野多津子
発行者 石井昭男
発行所 株式会社 明石書店

〒113 東京都文京区本郷1-10-10
電話 03 (3818) 6351 FAX 03 (3818) 5962
振替 00100-7-24505

組版/スマイル企画 印刷/平河工業社 製本/難波製本

装丁/根本眞一

ISBN4-7503-0606-1

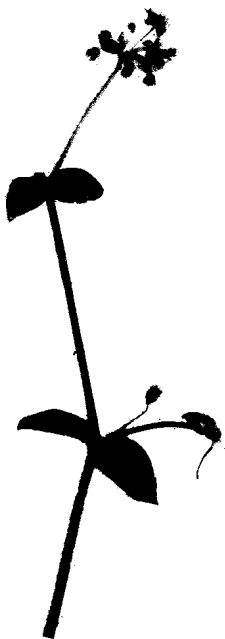


七三一部隊のはなし

十代のあなたへのメッセージ

著者●西野留美子

さし絵●日野多津子



明石書店

はじめに

広島から新幹線に乗り、四カ月ぶりに福山に降り立ったのは、東京よりもいち早い春を感じさせる三月のおわり。その一週間前まで中国の東北地方にいた私の体は、まだ小雪の舞う平房（ビシリアン、ハルビン南方の町）の寒さを忘れていないのか、背を固くして歩くくせをすっかり覚えていました。固く上がっていた私の肩が、広島に来てからいつの間にかゆるみ、心までポツと暖かくなっていました。

前回、福山を訪れたのは、その四カ月前の昨年十二月。婦人会議の主催で開かれた集いで、「従軍慰安婦」（せんぐんゐあんぷ）の話をしたのが、はじめでした。そのとき、地元的女性たちの素朴な暖かさとたくましいエネルギーに接した私は、そのときに感じた熱い思いをまだ体に記憶していましたから、降り立った駅で感じた温もりは、けっして

気候のせいだけではなかったのかもしれない。

この日私が福山を訪れたのは、「七三一部隊」の話をするためでした。会場には三百人ちかい人びとが集まっていたのですが、そのなかに中学生や高校生の姿がとでも多いのに驚きました。話し終えた後、主催者のはからいでその若者たちと円陣を作って話しました。そのときに、一人の少女が、こんなことを言ったのです。

「七三一部隊のことは、従軍慰安婦のことよりも分かりにくい」と。

私はその少女の話を聞きながら、なぜ分かりにくいのか、どこが分かりにくいのか考えていました。なぜ、他国の人びとを人体実験の材料にしてまで研究がなされたのか。どんな研究が何の目的でなされたのか。なぜ、戦後五十年近くもたつのに、当事国日本の人びとが、その歴史を知らないのか。なぜ、歴史の教科書できちんと教えられてこなかったのか……。おぞましい残虐な事実の数かずを聞き、知れば知るほどに、疑問は次つぎにわき起こってくるのです。と同時に、かえって七三一部隊って何なのか、見えなくなるようです。

その歴史を分かりにくくしてきたのは、七三一部隊（関連部隊も含めて）の犯した

事実を認めることなく、教科書から歴史の真実を隠し、次代に事実を事実として渡すことを回避してきた日本の歴史教育の結果ではないでしょうか。しかし、「教えられなかったから」だけではみなさんは納得しないでしょうし、そこから先に進まなければ、「教えられなかったから、どうするのか」ということの解決にはなりません。

事実が分かりかけた今、そこからどうするのか、見えなかった歴史事実を知りはじめた今、それをどう見据え、どう考え、どうしていったらいいのか。これから自分は何をしたらいいのか。何ができるのか。みなさんは今、そこに立ち止まっているのではないでしょうか。

そんなことを考えながら東京に戻った私の手元に、一通の手紙が届きました。小川理恵さんという、高校二年生の女の子からでした。実は理恵さんは、その一週間前、七三一部隊の歴史をたしかめる旅を、私とともにしてきた一人でした。理恵さんの手紙には、こんなことが書いてありました。

「小学校や中学校では、よく平和教育という時間がありました。いつも結果とし

て「戦争はしてはいけない」という教訓が出て終わりでした。だからみんな、『してはいけない』ということは頭ではわかるのですが、そのために何をしたらいいのかということについては、やっぱりよく分からなかったように思います……」

私はこの手紙を、くり返しくり返し読みました。そして、「してはならない」という結論まで、あなたたちに「与える」のはよそうと思いました。歴史事実を知った後に、分からなくなった自分にぶつかり、悩み、そしてそのなかで、それらの歴史事実をどうとらえ、どう考えるのかという「結論」を出すのは、あなたたち自身であり、その過程こそが、あなたたちが「分かる」ということになり、その道筋を大人が奪ってはならない、そう思ったからです。

とまどいはじめた若者がたくさんいることを知って、私はうれしいなと思うんです。悩んでいる仲間のなかに、私もいるからです。私も同じ一人だからです。

福山の若者たちの前で、私は宣言してしまいました。「東京に帰ってすぐに、七三一部隊のことを、あなたたちへのメッセージとして書きます！」と。

意気こんで宣言したものの、私は帰りの新幹線のなかで考えこんでしまいました。

「七三一部隊」について書くというのは、とても重くてしんどい作業です。少なくとも書き上げるまでは、「七三一」の事実のなかにどっぷりつかって日々を過ごさなければなりませんから。

七三一部隊の取材をはじめてほどないころ、私は「もうこれにかかわるのはいやだ！」と思ったことがあります。元隊員の方にお会いして話を聞いた日の夜、私はきまって寝つくことができませんでした。聞いた話が頭のなかをグルグル回り、それを吹っきるために目をカッと開けたり、夜中に他の本を読んで気分を変えてみようとしたり……。でも、目を閉じるとまた、「七三一」が私のなかでグルグル動き始めるのです。そんなことを何度も何度もくり返しながら、でもやっぱり私は、この取材を続けてきました。それはきつと、私も知りはじめて「分からないこと」が見えてきたからだだと思います。分からないままですませたくない。知らないままですませってきた四十数年の戦後史を、それに気づいた今、再びくり返すわけにはいかないのです。

福山で出会った若者たちと、理恵さんと、そして全国にもきつといるだろう同じ

気持ちのあなたと、私はここでいっしょに考えられたらいいと思います。

私がこれまで取材したのは、七三一部隊の一握りの事実でしかありません。まだまだ解明されない事実は、たくさんあります。しかも七三一部隊がしたことは一部であり、同じようなことを行なった部隊は他にもあります。それらすべてを一冊の本で書くことはとてもむずかしいことです。ですからここでは七三一部隊にしぼって書きたいと思います。

「してはいけない」という結論からの出発ではなく、あなたがあなた自身の頭と心で考えていくことのできる一つの入り口として、この本をあなたに届けられたらと思います。

十代のあなたからのメッセージにこたえて、再びあなたへのメッセージをここに発信^おります。

七三一部隊のはなし

十代のあなたへの
メッセージ

●目次

はじめに…………… 3

序章 追いかける夢…………… 15

第一章 満州まぼろしの旅…………… 29

・ 七三一部隊はまぼろしか？ 31

・ 柳条湖へは行きたくない 33

・ 互いちがいにしばられて 36

第二章 監獄への入り口…………… 45

・ 高圧電流に囲まれた魔窟まぐつ 47

・ 七三一部隊に送られた人びとは 50

・夫が七三一部隊の犠牲に 58

・「マルタ」を七三一部隊に送った憲兵 68

・「マルタ」の移送 73

第三章 七三一細菌部隊……………85

・研究プロジェクトと人体実験 87

・梅毒の人体実験 105

・女「マルタ」 121

・細菌投下作戦 130

・「マルタ」の処理 140

・七三一部隊の戦犯免責 143

おわりに……………153

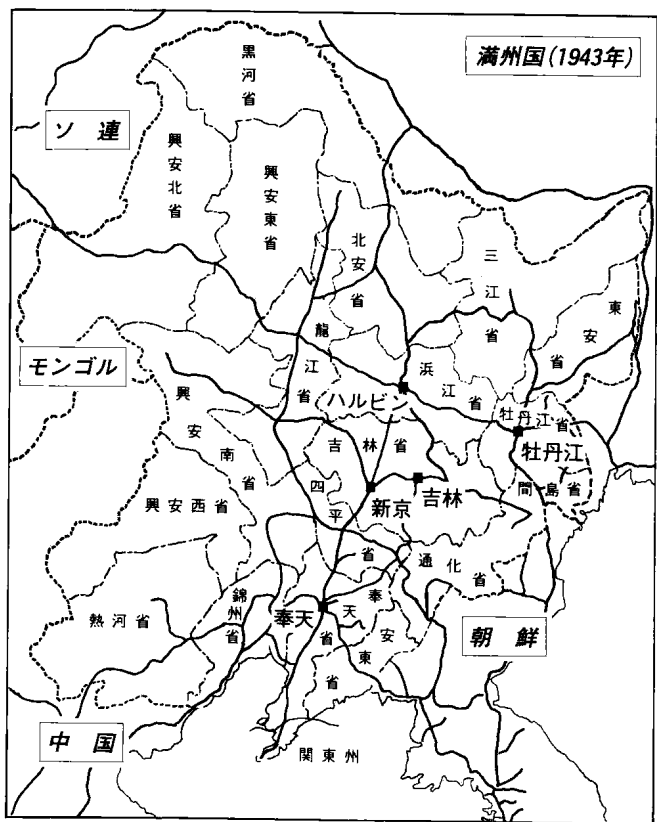
あとがき……………158

満州国(1943年)

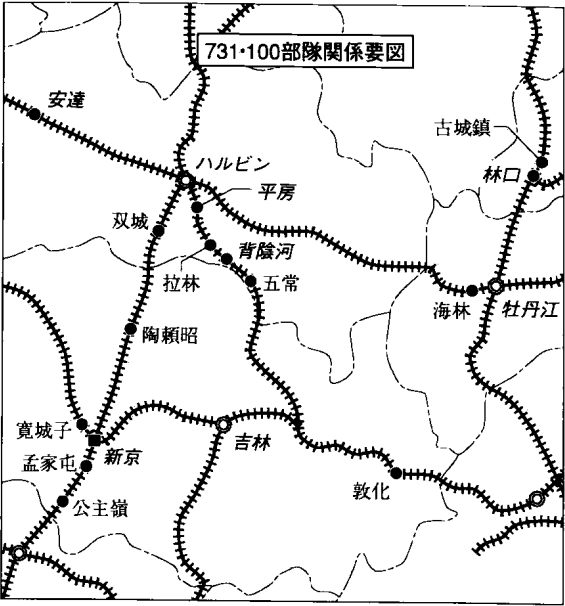
ソ連

モンゴル

中国



731・100部隊関係要図



*——文中に、「マルタ」という言葉がたくさん出てきます。ほんとうは使いたくない言葉ですが、当時彼らが置かれた状態を示す言葉として削ってはならないと思い、あえて使うことにしました。理解してください。

序章 追いかける夢

もう二年以上も前のことです。この日も私は、元七三一部隊の隊員であった人物に話を聞くため、彼の自宅を訪ねました。その方は、五十年以上前の記憶を丹念に思い起こしながら、よみがえった記憶を話してくださいました。そして話し終えたとき、こんなことを言ったのです。

「私はこれまで、何度も同じ夢をみるんですよ。七三一部隊にいたときの記憶が、夢で追いかけてくる……」

彼が話してくれた夢とは、こういうものでした。

「解剖台の上に、私が横たわっているんです。そのベッドのわきに、もう一人の私
が、白衣を着てメスを持って立っている。メスを持ったその自分が、ベッドの上の